

# 北海道医歌人会詠草

## 秋

寂しきの忍び寄るような秋の夜の萩の葉揺らす微かな風よ  
人は人我は我をと思えども人の言葉に耳澄ます我  
朴の木の大らかな枯葉飛び来たり飛び去り行きし秋風わびし  
夏の日には栄華を誇りし朴の木も秋には冷たい風にさらされ  
秋はなぜ人を寂しくさせるかと思いつつ行く落葉の道

江別 三宅 浩次

## センリヤウ

鉢植ゑの実生センリヤウ艶やかに この北の地に花を結ぶや  
登下がり風が起こりて電が降り 舗道に散りて溶けず残りつ  
コロナにて味覚不全の報道を 聞きつ煮物を噛みしめてをり  
守りなく初霜の日に父逝きつ 桜の母を羨みけるか  
サトイモの葉に朝しづく宿りけり 七夕の日に採りし記憶の

札幌 浜島 泉

## 知床峠

開拓の農民の行く手はばみたる知床の自然、世界遺産に  
岩を抱き岩を貫き伸びる樹に開拓悲運の歴史もそこそと  
放棄され雪の重みにつぶれゆく開拓小屋の語る現実  
静謐を今に湛える火山湖もマグマに灼かれし若き日のあり  
強風と寒さに耐えてへばりつく峠の木々に雪毛布の恵み

釧路 見玉 昌彦

## 国葬

国葬に何の法的故あらむ 党利党略、派閥の論理  
反対の溢るる世論に背を向ける『聴かぬ力』に声は届かじ  
尽くされぬ賛否両論 これもまた故人の遺産 独断専行  
二十億 無駄に使ひし税金を被災の民人 何をぞ思う  
前首相 心に沁みる葬送る言辞 何故に響かぬ国会答弁

北広島 古屋雅三知

## 綿虫

手放せる幼な風船 空高く 登りて秋に呑み込まれけり  
交はりし視線の先に イルカ居り 幼な馴染みの眼を思ひ出す  
飛行機の翼は影を失ひて 朝日を見下ろす 鳥海羽黒  
停まる度 前後確認ホイッスル 誰も降りない誰も乗らない  
花房を揺らすことなく舞ひ降りて 秋蝶 静かに陽を浴びにけり

函館 水関 清

## 溽暑

内地より帰り来たりし人の言ふ 当地の日向実にも涼しき  
日傘揺れ白のキャベリン長手袋 イージス遊弋木漏れ日の下  
焦げる息虚空に意識は溶け去りぬ 空港のドア開くる刹那に  
巨きジョッキ乳房とともに左右揺れる ビールパーティー涼感の裏  
煮え滾る真夏の風を頬に受け フルフェイス要とインカムの声

士別 竹内 幹夫

## 旅先にて

前ぶれのごとくに黒く低い雲 ゲリラ豪雨は 天からの滝  
国道の森を抜ければ谷あい 部落の光が螢火のごとし  
列車発ちホームに冷たき風が吹く 蜻蛉は陽の射す方へ飛びゆく  
絵の中より抜け出したるか 受付の猫と遊びし 夢二館にて  
宮島の家族写真に 鹿も一頭 妻と娘は笑み 我は寿老人

滝川 村田 英俊